

川柳雑誌

八月號

飢餓線上に立つも我等に川柳あり

(再刊の辭)

昭和十八年十二月號(通卷二三九)で一ト先づ終止符を打つた「川柳雑誌」が新日本の文化建設を目指して再登場するなどとは私自身考えでもなかつたことである。もうこの年で雑誌の編輯でもあるまいと思つてゐたので、これからの餘生を象牙の塔に立籠つて、研究に専念する心算でゐたが、終戦後、日が経つに連れて川柳不朽洞會員は云ふまでもなく、柳友諸君からは非再刊して欲しいと云ふ切な

る望みを聴かされてはそうせうむげにもしりぞけかねて、驚馬に鞭つて、隘路の多い出版事業に、再び携はることにした。一ト度再刊と決意した以上、どんな難關にぶつつからうと、尻古垂れるやうなことはしない積りだ。しかし非營利的な仕事だけに、現實の厳しさはなかく、容易ではな

い。平和を冀求され國民の飢餓を深憂される天皇の下に、進駐軍の朗らかな歌謡曲のラヂオを聴きながら、「川柳雑誌」再刊の辭に筆を執つた。「川柳雑誌」の生みの親は私であるが、育ての親は一つに諸君の手でなければならぬ。頼むぞ諸君!(路)

不朽洞句抄

麻生路郎

坂手島の林員寺にて(三句)

もてなしの一つに島の寺の月
僕一人起きてるやうな鳥の月
漁火ももう見えなくなる程でこそ
高師ノ濱にて
又しても公憤となる程ませうや

ラヂオ又英語で何か云うてはる昔の高きまでも負けてる事を知り將軍の自決電話がなりひびき奥さんの死装束は夢居染み柳秀長時博士を悼むのむ語そのまゝ電話切れらまひアムムーさかまゝ家賃より高し買出しのくせに天皇制を論じ日曜をおつけのうかし育て、居贈物開値で感謝されるなり

白米の辨當へ眼の多いこと
もう貯蓄ないのが新聞投書欄
公職を追はれたい英語塾
らしくない正月自由市場抜け
起つ噂 辭める噂で、松も過ぎ
配給をさへも流して、生さんとす
金さへあればなどと大衆まだ醒す
負たことしきみと知る壕舎の灯
復員の父待つ壕舎裏れなり
軍閥をもう恨まない壕舎なり
遊ぶ子が壕舎を探しあて、くれ
まつ新らの布團壕舎を奪むがらせ
闇市の面子などは遠うに捨て
ギョキと覺えて春を迎へる子

翠光居を訪ふ

この夜も僕が焼いたともてなされ
丹前だ、餅が故郷はよいところ
購買りの多い天皇制を馳き
だがしがしなどと天皇制を維持
打倒され、ばいっ、氣樂な御身分か
AT HOMEを寫眞に血の湧くこと
農家ではお天子様は地に墜あす
天皇制で親子一歩も譲らない
天皇制列らないわで片づける
商用の外に天皇制のこと
天皇制父は沈黙させられる
共和制などと眞似より知らぬなり
銀鉄線へまた一丁はあるならん
あの博士今度は民主主義を賣り
インフレへもう役得も追つかず
Cが不足Mが不足の昨日今日
主婦として闇市の値をそらんじ
汚れた手パンを賣る手に宇置る手
ふるぎとの名十を訪へば菜を繰き
智者學者インフレさんをもて餘し

一萬や二萬長屋の端で食ひ
或る人に
一ブルス一で日本を生かすべし
水車は廻る働く外はなかりけり
地下足袋の群にいつしか父も慣れ
五十圓の肉へ手が出ぬ子 澤山
二食ですいイエ主義では有ません
拾石の一つたらんか立候補
インフレに割切れぬこと日に多し
夕の膳間の値段を、ききながら
泥濘の英語なりけり 墨長以下
ハツタリへ 巡査は顔へ紐をかけ
逐鹿陣營より

志士として花の散るのも知らぬ也
新聞へはや葉櫻の候とゞけられ
落選へはや葉櫻の候となり
十五坪建てたとハガキ来たつきり
このシャツのまゝで逃たと職災者
先生も患者も開襟シャツのまゝ
時の人にまさかシャツでも會はる
シャツよりも肉内よりも米のこと
女店員男のシャツを着て出かけ
供出を知らず 蟻が飛び違ふ
疎開の子 繩の帯するまでに慣れ
この村も非農家の子に寫生され
四天王寺獨立奉告之儀に
招かれて(五・廿二)
けふからは自由の鐘のなるところ
買出しと知つてか牛飼房を向け
ラヂオでは今播くものの談なり
輪に描いたやうに田舎へ雨が降り
配給の肥料に刺し 田の廣さ
その老後 粉食の世話 孫の世懸
一ト驛の汽車通學も農家の子
農家の子と代えたかランドセル
百姓の子だが文學博士なり